

例に使用したので報告する。

【症例概略】3例ともイリノテカンを含む従来の化学療法に抵抗性だった。1例は著明な皮膚症状により治療継続できなかった。2例でKRAS遺伝子の変異を認めた。KRAS野生型の1例では、臨床的には症状改善を認めた。

【KRAS遺伝子】KRAS遺伝子変異がある症例には抗EGFR抗体薬の上乗せ効果は期待できない。KRAS遺伝子変異を解析することで抗EGFR抗体薬の効果の予測ができるが、保険適応でないため現状では全例の解析は難しい。

【まとめ】当院でのセツキシマブ使用3例を報告した。適切な薬剤使用のためには、KRAS遺伝子変異解析を行うことが望ましい。

### 3 大腸癌腹膜播種に対する治療成績

丸山 聡・瀧井 康公・久原浩太郎  
県立がんセンター新潟病院外科

当科で手術を施行した腹膜播種を伴う初発大腸癌150例の検討を行った。平均年齢64.5歳(17~92歳)。男性69例、女性81例。結腸107例、直腸43例。P1 44例、P2 37例、P3 68例。全症例のMSTは12.3か月。単変量解析では①基準値の10倍をcut offとしたCEA②術前腹膜播種診断の有無③腹膜播種の程度④肝転移の有無⑤遠隔転移の有無⑥Cy⑦原発巣切除の有無⑧手術根治度で生存率に有意差を認めた。多変量解析では原発巣切除、手術根治度Bが独立した予後規定因子であった。根治度Bの手術がなされたのは52例。再発を40例(76.8%)に認め、そのうち腹膜播種再発は22例。生存期間の中央値は30.6か月。5年以上の長期生存例は9例で、根治度Bの手術が8例。初回手術時に同時肝切除を施行した2例、再発に対して外科的切除を施行した4例を含んでいた。

### 4 直腸癌術後局所再発の外科治療

中野 雅人・飯合 恒夫・谷 達夫  
野上 仁・島田 能史・関根 和彦  
高山 勝義

新潟大学医歯学総合病院第一外科

【はじめに】今回我々は、当科で行った直腸癌の術後局所再発に対する外科治療について検討し、その意義について考察した。

【対象】1986年1月から2009年4月までに当科で行われた直腸癌術後局所再発の外科切除例18例を対象とした。

【結果】局所再発部位は、吻合線上9例、吻合部近傍3例、隣接臓器2例、骨盤壁2例、側方リンパ節1例であった。手術時間は平均411分(80-665分)、出血量は平均2015ml(30-5079ml)、術後入院期間は平均52日(7-337日)であった。合併症は全体の77.2%に認め、特に重篤な合併症は22.2%に認めたが、手術関連死亡は認めなかった。2年生存率、5年生存率はそれぞれ56.9%、22.8%であった。完全切除例と不完全切除例の5年生存率は、それぞれ30.0%、16.7%であり、有意差こそないものの、完全切除例で良好な傾向にあった。

【考察】再発なく5年以上長期生存している症例もあり、今後適切な術前診断による外科的治療の適応判断が重要であると考えられた。

### 5 大腸癌術後再発に対して手術治療を施行した症例の検討

桑原 明史・酒井 靖夫・田中 亮  
田辺 匡・武者 信行・坪野 俊広

済生会新潟第二病院外科

2006年から3年間に大腸癌術後再発に対して手術を施行した41例の成績と新規抗ガン剤の使用方法について検討した。

【結果】年齢：中央値49歳。観察期間の中央値は68ヶ月であり、初回手術から再発までの期間は中央値16ヶ月であった。原発部位は結腸22例、直腸19例。再発形式は肝転移、局所再発、腹膜播種、肺転移の順であった。37例で根治切除が行わ